外国人が住みたいと思う魅力ある日本をめざして

―アレックス・カー氏を囲み、その著書『犬と鬼』をめぐる対話―

『犬と鬼』
講談社　本体 2500円

2002年10月11日（金）、六本木・国際文化会館において「アレックス・カー氏を囲んで」の会が開催されました。様々な分野の皆様にご参加いただき、現在の危機に陥った日本の問題を我がこととして捉え、カー氏の近著『犬と鬼 －知られざる日本の肖像－』（講談社刊 原題：Dogs and Demons）をめぐってカー氏と対話の機会を持とうと、弊社が主催したものです。

アレックス・カー氏とは以前からお親しくさせていただいており、当ヴィタリテにおいても24号巻頭インタビューの中で、日本の美についてお話をしていただいたことがあります。カー氏は、父君の仕事の関係で12歳のときに来日し、その後エール大学、オックスフォード大学で日本と中国について学ばれ、京都の亀岡市にしばし居を構えておられたこともありました。東洋の古美術についても造詣が深く、日本の伝統文化に対しても並々ならぬ慧眼をお持ちです。94年に『美しき日本の残像』（新潮社刊）で新潮学芸賞を受賞し、その中で失われゆく日本の美について記され、大きな反響を呼びました。

ヴィタリテ41号で徳山二郎氏の著書をご紹介させていただいた折に、カー氏の著書『犬と鬼』についても軽く触れさせていただきました。アメリカ本国にて刊行後、『News Week』誌でも取り上げられ、氏の日本に対する鋭い視点を軸に展開される新しい日本論が高い評価を得ています。この誌上では、カー氏と参加者の皆様が交わされた対話のごく一部しかご紹介することができませんが、『犬と鬼』はカー氏が完成までに6年という歳月を費やされた力作ですので、ぜひ多くの皆様にご購入いただければ、ご本人も大いに喜ばれることと思います。

また、今回ご参加いただいた皆様にも、この場をお借りして改めて感謝の言葉を申し上げます。

＊

Mr.カー： 今回『犬と鬼』の中で色々書かせていただきましたが、出だしは自然環境の破壊です。以前『美しき日本の残像』を出版していただきましたが、どこかで疑問が残ったままだったのです。自然環境の破壊というものは、近代化をめざしたどこの先進国でもやってきたことであり、私は単に昔の日本を懐かしむロマンチストなのではないかと。そこで日本をじっくり研究しようと考えました。そのとっかかりが自然環境の破壊であり、また今でも私が一番憂いている問題でもあります。

Mr.崎山： 著書の中で電話線や電線を地下に埋めていない先進国は日本だけであることや、コンクリートばかりの日本について厳しくご指摘されていますが、実は今まで全く意識していませんでした。これは私だけでなく、多くの日本人に電線やコンクリートを気にする視点が欠けているような気がします。

Ms.山浦： 私は千葉大学の園芸学部を卒業したのですが、農家に研修に行って以来農家の方々と親しくおつき合いさせていただいています。そこで感じるのは、農村の崩壊が現代のコンクリート社会を生み出してしまった大きな原因であるということです。農家の方々は、サラリーマンはなんとなくきれいで立派な生活をしているように感じ、都会人に対してコンプレックスを抱いています。農家の人間としての誇りや自信を失ってしまっているのです。それが若者の離農を促し、てっとり早くコンクリート事業に手を出すきっかけとなっているように思います。

Ms.剛： 農家の方々だけでなく、日本国民全体が日本人としての誇りを失っているように思えます。そして子供にそれを与えることのできなかった私たち世代の責任をとても感じます。

Mr.伊藤： 日本の教育、特に小学校教育にも問題があると思います。戦前は、ちょっと郊外に出れば美しい風景が広がっていて、農家の人も自分の生活を楽しんでいました。戦後の日本の教育現場では、「個」の価値観の確立が疎かにされ、小学校の子供までもが権威の刷り込みのように校長先生は偉いと信じてしまっているような状況があります。個人としての価値観や誇り、自信といったものが育たない環境にあるのです。

Mr.カー： プライドは大きな問題の1つであり、日本だけでなくアジア全体の問題としても広がっています。そこには文化ショックというものがありました。西洋社会では、ゆっくりと産業革命が進んだため、古いものと新しいものを融和させていく知恵を身につける時間的余裕がありました。しかし、アジアではあまりに突然産業革命が起こり、その知恵を身につける時間がありませんでした。衣服にしても建物の様式にしても全てが西洋からきたものであり、そこに文化的な断絶感が生じたのです。アジア全体で、自分たち本来の文化にはどんな価値があったのか、もしかしたら西洋文化の方が勝っているの

■ 参加者氏名（敬称略・順不同）　＊○は第二部夕食会のみご参加の方々です。

青野 恵子 / あおの・けいこ　ざくろ坂ギャラリー 一穂堂 社長
石田 民雄 / いしだ・たみお　有限会社石田ライティング 代表取締役
伊藤 朗 / いとう・あきら　日本ハンドベル連盟理事長（元青山学院初等部部長）
内田 洋志 / うちだ・ひろし　中央大学総合政策学部
小野 隆彦 / おの・たかひこ　早稲田大学空間科学研究所客員教授
木原 晋一 / きはら・しんいち　経済産業省
剛 のゆり / こう・のゆり　主婦（伊藤朗先生御令嬢）
崎山 浩司 / さきやま・ひろし　ニスコンサービス株式会社役員
尺田 可規 / しゃくた・よしき　株式会社SQUARE 代表取締役・一級建築士
日野 晋 / ひの・すすむ　国土交通省 住宅局住環境整備室室長
日原 行隆 / ひはら・ゆきたか　有限会社エス・エフ・プラン 代表取締役
広中 和歌子 / ひろなか・わかこ　参議院議員
本田 眞美 / ほんだ・まみ　財団法人 日本腎臓財団
本田 文子 / ほんだ・ふみこ　ピアノ講師（横山サト子様御友人）
松田 正允 / まつだ・まさみつ　東京不動産ネット株式会社 顧問
松原 仁 / まつばら・じん　衆議院議員
武藤 正 / むとう・あきら　株式会社東栄 常務取締役
山浦 晶 / やまうら・あきら　千葉大学医学部脳神経外科教授（元院長）
山浦 牧子 / やまうら・まきこ　主婦（山浦晶先生御奥様）
横山 紘一 / よこやま・こういつ　立教大学日本文学科教授
横山 サト子 / よこやま・さとこ　主婦（横山紘一先生御奥様）
○ **Nils Hornmark** / ニルス・ホーヌマルク　ホーヌマルク株式会社 社長
○ 江戸 京子 / えど・きょうこ　財団法人 アリオン音楽財団 理事長
○ 加藤 且行 / かとう・そゆき　公認会計士・税理士
○ 佐々波 楊子 / さざなみ・ようこ　慶応義塾大学名誉教授
○ 西川 高幹 / にしかわ・たかみき　アンダーソン・毛利法律事務所
○ 三國 五百枝 / みくに・いおえ　エヌ・シー・ジャパン株式会社
（計27名）

■ モデレーター：　佐多 保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

ではないかというコンプレックスが生まれてしまいました。特に日本は戦後すぐに産業革命が起こり、製造業が国の第一目標となったために、行政、教育、文化、果ては街並みまで、全てがそのために犠牲になりました。その結果、古いものを汚い、恥ずかしいと感じるようになってしまったのです。東京オリンピック開催の年に、京都の街が「近代的」であることを証明するために京都タワーができたことなどは、典型的な例だと言えるでしょう。そして、古いものは汚いまま残しておくか、あるいは壊して工場のような街並みを造るか、極端な選択肢しか残らなくなってしまったのです。

日本は観光産業という産業においては失敗したと言われています。京都は経済発展の名の下に京都を破壊しましたが、結局それが観光産業という大きな産業をだめにすることになりました。中国などの大国が徐々に豊かになり、何千万人という人間が旅行を開始した現在では、外貨稼ぎという基準で計ると、実はコンピューターや自動車よりも大きな産業なのです。アメリカやフランスなど多くの先進国が、観光産業で潤っているのです。残念ながら、観光資源をだめにしてしまった京都は現在経済的に非常に停滞している状態です。

Mr.伊藤： 私は京都で生まれ育ちました。竹内栖鳳（せいほう）（＊1）は私の祖父にあたるのですが、京都の嵐山にある竹内栖鳳記念館が現在経営危機に陥っており、競売にかけられています。なんとかしようと娘とともに色々対策を考えたのですが、法的な面でなんの措置も講ずることができないのです。全てお金の問題だけで動いていってしまいます。京都市や京都観光局に相談しても関係ないと言うだけです。

家内の祖父が都ホテルの初代社長だったのですが、現在都ホテルは近鉄グループの傘下に入り、今の形へと改装されました。カーさんも随分と都ホテルを批判されていますが、以前の都ホテルはとても京都の街並みに馴染んだ建物でした。そして家内の実家は、この都ホテルを模して造られた洋館だったのですが、結局相続税でどうにもならなくなり売却しました。それをまた不動産業者がつまらないものに変えてしまったのです。古いものをどうやって新しくしていくのかという技術を身につけられなかったことは、まさに京都人の失敗だったと思います。

Mr.尺田： 日本の田舎とアメリカの田舎を比較しても、アメリカの田舎は明るくてみな生き生きと暮らしているような印象を受けますね。金銭的な面でもどちらが恵まれているのかというと、やはりアメリカです。それは国の施策として、日本では地方で豊かに暮らせるような仕組みが作られてこなかったということがあります。その上、日本ではお金を持っていても慎み深く生きていかなくてはならないという風潮が未だに根強い。これは都会でも同じです。その結果、文化的なものにお金が流れないという矛盾が生じます。

Mr.日野： 日本人はプライドを持ったり持たなかったりと揺れているところがあって、場合によっては変な自信を持ってしまう傾向がありますね。自分たちは非常に優秀な民族であり、美しさについても他の国と比べて優れた感受性を持っているというように。だた現実を見ますと、先ほどお話にも出た電話線や電線のように、私たちは普段その存在を意識せずに生活しています。指摘されるまで誰も気づかない。

私は国土交通省で住宅関係の仕事をしているのですが、街並みに関しても、まず日本人は街並みを無視した家造りをする傾向があると実感しています。10年先、あるいは自分が死んでしまった後の50年先のことまで考えて家を造ってくださいと呼びかけなくてはいけないと思うし、またそれをチェックするようなシステムが必要だと感じています。

また役人の1人として発言させてもらえば、役人は一生懸命やろうと思って仕事をしていることは事実です。ただ、「和をもって尊し」

の精神といいますか、それが結局様々な利害関係をうまくごまかしてなんとか1つに収めようという姿勢でやってきたところがあることは否定できません。

Ms.青野： 私の自宅の近くでも、幼稚園児が1人通園するので車が通る場合の危険を考えてポールを立てたいと、役所から電話がありました。街の景観などを考えずに、「安全のため」と言われると行政はただそのまま動いてしまうのです。今は地方に行ってもどこもかしこもフェンスが張ってあり、とても汚く感じます。

主人の仕事の都合でアメリカに住んでいたことがあり、時々日本人のご家庭にご招待されてお伺いする機会がありましたが、折鶴がぶらさがっていたり、五円玉で作った亀の置物があったり、全く無秩序なのです。日本を代表するような方々が、あまりに日本の文化に無頓着という気がします。むしろ、日本に来ている貧しい外国人留学生の方が、お金をかけずに上手に部屋の中を日本のものでコーディネートして楽しんでいます。

Mr.カー： ごみごみ、ごちゃごちゃしている街に住んでいると、感受性も麻痺してくるのですね。私はやはり日本人ほど感性が豊かな民族はないと信じているのですが、感受性の麻痺というのは現代の深刻な問題です。ただ、意識的には麻痺していますが、どこか心の中では文化的なものに餓えているのだなと感じることが多々あります。

Ms.青野： 日本人の言葉も乱れてきていて、語彙も少なくなっていますよね。カーさんの著書の中でも、『「かわいい」潰けの日本』という記述がありましたが、私が経営しているギャラリーでも、スタッフが展示する作品を手にとるたびに「かわいい」を連発するのです。若い子だけでなく年配の人までがそうです。しかし、先生が丹誠を込めて作られた作品を「かわいい」と表現することは、貧しい発想だと思うのです。そこで、私のギャラリーでは「かわいい」という言葉は禁止し、他の言葉で感性を表現するように指導しています。

最近の若い女性を見ていても、エステに行ってネイルアートをして、お昼は高いものを食べに行って、そしてしまいにはデパ地下でお惣菜を買って帰るということになります。そのような女性たちが母親になったときに、どんな子供たちが育つのだろうと心配になります。カーさんの目には日本の女性はどのように映っているのでしょうか。

Mr.カー： 日本女性は両極端ですね。ある意味で男性がしばられているしきたりから自由な社会的立場にあるので、柔軟性があります。NPO団体のリーダーは女性の方が多いのですよ。また芸術の世界で活躍されている方もたくさんいらっしゃいます。ただ、残念ながら社会的仕組みや女性教育の面で古いシステムがそのまま残ってしまっているため、女性を幼稚にしてしまった部分も大きいでしょう。女性問題も日本が抱える課題の1つと言えます。私は現在1年の半分をタイで過ごしているのですが、タイの女性は銀行や大企業の社長など、とても高い社会的地位にある方が大勢いらっしゃいます。

Mr.日原： バブル時代について少々触れさせていただきます。私は長年静岡銀行に勤務していましたが、静岡銀行はアメリカのムーディーズの財務格付けで、現在日本でトップの銀行となっています。静岡銀行の礎を築かれたのが平野繁太郎氏ですが、在職中は「役人の言うことは一切聞いてはいけない」という姿勢を貫いた方です。田中角栄氏が大蔵大臣だったころ、静岡銀行には未だ1人も大蔵省から人が入っていないということで、2度にわたって直々にお話があったそうです。しかし2度とも平野氏は拒否されました。しまいには、田中大臣から握手を求められたそうです（笑）。

また、既に会長職にあられたときに、バブル真っ只中の時代であったにもかかわらず、都内のノンバンクに貸し付けていた資金を回収しなさいと指示しました。平野氏は昭和の大恐慌を経験されていたので、そろそろバブルもはじけるかもしれないと危機感を抱かれていたようです。そして回収した資金を地元静岡の中小企業に注ぎ込みました。誰がなんと言おうと自分の信じた道を行くという、明治時代の人間の気概というものを感じました。そして同時に、自分の足元を常に見据えた経営のあり方というものが、最も大切なのだと感じました。

Mr.松田： バブルがはじけて日本がなぜこのようになってしまったのかと考えると、やはり経営者に責任感というものがなくなってしまったことがあると思います。いわゆる護送船団方式の下に、失敗しても表沙汰になることなく、経営者も責任を追及されずに済む銀行の仕組みというものが出来上がってしまいました。これは他の業界にも言えることです。戦後日本らしさを破壊していくことで日本は発展しましたが、そのつけが回ってきているのだと思います。

私は第二次世界大戦のときに小学校3年生だったので、戦中も戦後の記憶もあります。終戦の年の日記を見ますと、既に「公用語は英語にしよう」という意見が出されていたことが分かります。日本は過去のものを全て捨てなくてはいけないということで、まず形あるものから失っていきました。例えば、お正月もそうですね。現在は神社にお参りに行って、そしてあとは寝正月です。昔ならこんなことは考えられませんでした。しかしそのような動きを助長し、むしろリードしたの

が行政だったと思うのです。今の日本の問題というのは、歴史的な流れの中に必然としてあったのではないでしょうか。

Mr.横山： ここまでの話し合いを見てみますと、日本のどこが悪かったのかということを論じることに終始していますが、未来に向かってどうしていくべきなのかを話し合うことも必要なのではないでしょうか。まず、カーさんにお伺いしたいのですが、日本の文化を「よい」とおっしゃいますが、具体的にどこが「よい」のでしょうか。言葉で表現することは簡単なのですが、実際それを本当に分かっている方がどれだけいるのか疑問に感じているのです。

Mr.カー： 日本に限らずあらゆる国の伝統文化を「よい」と考えています。なぜなら、文化には何百、何千年と磨き上げてきた精神的な知恵があります。それこそ、哲学、人との相互関係、霊界に対しての思いまで全てが文化の中に潜んでいます。なぜ文化や伝統というものを学ぶのかといえば、そういうものに触れることで、人間性や高貴な心というものが身につくと考えているからです。

Mr.武藤： 平野繁太郎氏のお話を伺って思い出したのですが、先日ある人と話をしていて、「どうも最近の日本にはリーダーとなるべき大人物がいなくなってしまった。日本人の心から『卑怯』とか『やましい』といった言葉がなくなってしまったからではないか」と聞いてはっとしました。カーさんがおっしゃったように、やはり文化には高貴な心というものが根幹にあるのだと思うのですが、結局今ある様々な問題というのが文化の喪失に起因しているのではないでしょうか。

Mr.山浦： 私は横山さんに同感なのですが、やはり確認作業ばかりをしていたのでは、将来の展望へとつながりません。私は病院長として長くやってきましたが、院内でもヒューマンエラーというものが絶えず起きています。しかし人間である限り必ず犯してしまうミスというものがある以上、エラーを犯した人間ではなく、エラーがそのまま突っ走ってしまった環境を問題にすべきです。環境破壊が日本人が犯したエラーの1つであるならば、誰がエラーを犯したのかを追及するよりも、エラーがそのまま突っ走ってしまったシステムそのものを見直すことも必要なのではないかと思います。

Mr.カー： 私は『犬と鬼』の中では、あえてこれからどうしたらよいのかという具体的な提案を一切していません。外国人が日本に関する記事や本を出すと、えてして「あーしろ、こーしろ」という押しつけ論になりがちです。今の日本をそのまま鏡のように映し出し、その現状を認識していただくことで、自然と日本の中から解決策が出てくるのではないかと期待しているのです。今とても日本的だと思われている金融界のやり方などは実は歪んだ形であって、例えば静岡銀行の平野氏が行った経営のように、純粋な日本人のやり方を取り戻せば日本は再生するかもしれません。

Mr.内田： この中では唯一の学生ですので、学生という立場からお話しさせていただきます。現在所属しているゼミの仲間に、カーさんの著書を読んでもらって意見を聞きました。やはりほとんどがここに書かれている日本の現状について知りませんでした。そして一番問題だと感じたのが、そのような現状をどう思うかと聞いたときに「関心がない」という返事があったことです。授業の中でもまず「グローバリゼーション」という言葉が取り上げられ、世界のスーパーパワーであるアメリカに追いつけ追い越せということで、どうしても学生も海外に目が向きがちです。

Mr.カー： それは非常に逆説的な意味を含んでいると言えます。日本は長い間国際化、国際化と言いながら結局そうはなりませんでした。京都の街並みを現代的にしたから国際的になったかといえば、そうではなかったですね。つまり、京都らしさを失ったことで、逆に国際的には価値のないものになってしまったわけです。日本の伝統文化や自然破壊の問題について興味があるというのが真の国際人です。それらのものに無関心な人間がいくら勉強をしたところで、世界に出たときに国際人としては認めてもらえません。日本の大学の誤解はここにもあるのではないかと思います。

Mr.小野： 私は昨年の4月から早稲田大学の客員教授をしていますが、現在早稲田大学の中では改革が進められています。その1つに社会人学生の受け入れがあります。私が所属している研究所は学部と全く関係のない、いわゆるプロジェクト研究所で、独立採算制の形をとっています。そのため、あらゆる学部から学生や社会人学生が集まってきます。社会人学生は様々な目的意識を持って集まってきますので、そこから学内の意識も変わってきます。また、

研究所も独立採算制ということで、スポンサーに対して責任を持って研究を行いますし、また私たちも真剣に取り組んでいます。このように、少しずつではあるものの、大学のあり方にも変化が出てきています。

Mr.横山： 私は立教大学で教授をしていますが、私の授業に出てくる学生は非常に熱心です。人間は落ち始めると、もっと深いところにある普遍的・潜在的な意識が目覚めてくるのです。それをいかに問答で語り合い、一緒に実行していくかということが重要なのだと思います。4年ほど前から、「タバコのポイ捨て絶滅運動」と称して、キャンパス内のタバコの吸い殻を拾って歩いているのですが、どんどん学生が集まってきて彼らが率先して動きます。私が教えられることの方が多いくらいです。むしろ、教授たちの方が「先生、大変ですね。ありがとうございます」なんて言っている。私は今の日本の若者は信用してよいと思います。そして、彼らが「私とは?」「この世界とは?」ということを静かに眺め考えることができるような、ゆとりある時間を持った大学教育をめざしたいと考えています。

Mr.伊藤： もう一度京都の話をさせていただきます。今CMで京都に行こうとしきりに言っていますが、では京都に来られてなにを見ているのでしょうか。例えば大文字焼がありますね、あれを京都人は“ 送り火 ”と呼んでいます。仏さまが帰ってこられて、また戻って行くための道を迷わないようにという意味で、とても宗教的な行事なのです。京都観光局は一切関与しておらず、あくまで生活として行っているものです。文化喪失の話がありましたが、文化というのはこのように生活ですから、結局日本人から生活というものがなくなってしまったのだと思います。生活をしてみて初めて文化はその人のものになります。教えてどうにかなるものではありません。

私は現在日本伝統芸術振興会の理事をさせていただいているのですが、今年から小学校に邦楽が導入されることになりました。文部科学省もよくこういうことを思いついたなあと思っています。こういうことをメディアを通して、もっと提議し取り上げていただきたいと思います。

Ms.青野： 邦楽を取り入れるお話ですが、安易に邦楽を取り入れることについて懸念しています。邦楽というのは五線で表わせないのですが、学校ではそれを無理やり五線に置き換えてドレミファソラシドで教えているわけですね。でもそれではあくまで“ 邦楽もどき ”です。日本の文化を真剣に考えるのならば、ブームのようにして終わらせてしまうのではなく、一人一人が日本文化を深く掘り下げて、その上で実行に移していただきたいと願っています。

Mr.カー： 確かに、日本文化を教育の場に取り入れる方法については、難しいところもたくさんあると思います。でも私は何十年ぶりかで最近日本に希望を持ち始めているのです。そもそも、“ 邦楽を取り入れよう ”という発想自体が、今までの日本を考えると大変画期的なことなのですから。

Mr.尺田： とてもゆっくりではあるものの、やっと日本にも新しい風が吹き始めているように感じています。ただ、電線を地下に埋めようという話は私が学生だった30年前からあったのに、実際に動きが始まったのはやっと最近です。日本は既に後がない状況にあるので、できるだけ速やかに対応策を実行していく方法を考えるべきだと思います。例えば、80年代初頭のアメリカが一番元気がなかった時代、当時のカーター大統領が、古い建物を再利用した場合にはむこう5年間固定資産税をなくすといった政策を行っています。京都の街並みの問題でも、ただ京都の街を守れというのではなくて、京都を守ることでどのような効果があるのか、そしてそのことで京都の人々が具体的にどのような恩恵を受けることができるのか、それらをはっきりさせたシステムを作ってしまえば、かなりのスピードで日本も再生していけるような気がします。

Mr.木原： 私も官僚という立場からあえて反論させていただければ、お役所と聞くとみなさん規制の上にあぐらをかいているという構図を思い浮かべることが多いのでしょうが、経済産業省ではむしろ規制緩和の方向で様々なことが検討されています。例えば、現在電力市場の規制緩和を推し進めていますが、むしろ事業者がそれに反対しているといった実状があります。また、カーさんの著書の中に、お役所の経費水増しや空出張などの記述もありましたが、少なくとも私自身や私の周囲ではそのような話は聞きません。経済産業省は通称“ 通常残業省 ”などと言われていまして（笑）、みな朝の2時、3時まで働いています。タクシーで帰る場合も当然相乗りですし、残業代も予算の制約から正規の残業代の一部しか支払われていません。このような実態があることも知っていただきたいと思います。

しかし、これから日本が大きな方向転換をしていくには、行政でも経済界でも、決定したものを覆すくらいの柔軟な考え方を持つことがさらに必要になってくるのではと思います。日本はすぐにアメリカはどうだ、イギリスはどうだと考えてしまいがちですが、イギリス人の官僚と話をしていると、彼らは今まで前例のないところで仕事をしてきたせいか、納得すればすぐに方向転換できる柔軟性があります。

Mr.松原： 政治の面から日本を考えれば、大きな問題は日本の税制

―「アレックス・カー氏を囲んで」―
日時：2002年10月11日（金）
場所：国際文化会館 第一会議室
■ **第一部** セミナー　**14:00-18:00**
参加者の皆様にカー氏の著書『犬と鬼』をめぐって議論を交わしていただきました。討論は白熱し、**18**時半を過ぎて終了となりました。本文内容として抜粋させていただいたものです。
■ **第二部** 夕食会　**18:30-20:30**
第一部にご参加されたほとんどの方が残られ、さらに新たな参加者をお迎えして夕食会となりました。その間、アレックス・カー氏よりスライド写真を見ながら日本の風景についてお話をしていただきました。その後も積極的に議論が交わされ、**21**時を回って会は終了となりました。

にあると思います。私の持論ですが、税制は国民誰もが理解できるようにあるべきです。今の消費税を2倍、3倍にして他の税制は廃止するというくらいでもよいと思います。特に相続税は色々な意味で問題が多い。佐多さんにお聞きしたのですが、イタリアのベルルスコーニ内閣では、今年から相続税をゼロにしたそうですね。

それから文化のことですが、カーさんが再三おっしゃられているように、文化というものは様々な付加価値があります。永田町を見回すと、非常に下品な人間が多い（笑）。しかし、経済を再生するためには、政治家もまた文化を重んじるということを率先してやっていかなければと思います。

Mr.カー：日本の街をだめにした要因の1つは確かに相続税です。国で一律同じ税制というのも問題があると思います。例えば、京都の場合であれば、古い建物を残すのなら税の面で優遇するなど、そういった対策が必要ではないでしょうか。

Ms.横山：文化ということでは、身近なところでは伝統行事がなくなってしまったということもあります。お正月にしても今はお節料理をつくる家庭が随分減ってしまいました。確かにお正月の準備は女性にとっては大変な重労働です。しかし、いざ自分がやらなくなってから、あのなにもかもを一新して迎えるお正月の爽快さが忘れられなくて、とても寂しい思いをしました。大変だから止めてしまおうというのでは、日本の文化はどんどん下向きになっていってしまいます。伝統行事を家庭の中で復活させていくことも、文化というものを次世代に伝えていく有効な方法なのではないでしょうか。

Mr.石田：戦前の産業構造を見てみますと、日本では農業も含めて自営業が50%を占めていました。それが戦後国民の大半がサラリーマンになり、農家でも苦労して子供たちを学校にやり都会に出すということをしてきました。しかし彼らが定年を迎えたとき、帰るところがない、やることがないということになるわけです。農業を衰退させた要因はここにもあるでしょう。

私は脱サラして20年になりますが、サラリーマンの管理システムというものに馴染めなかった1人です。最近、「個業」（＊2）という言葉が出てきましたが、もう一度みんなが「個業」に戻ってみたらどうかと思うのです。不況になると、みなさんなんだか不安になってやれ経済政策が悪いだのとおっしゃいますが、その前になにか自分でやってみようと考えてもよいのではないでしょうか。敗戦後私たちの祖父母がやってきたことなのですから、やれないことはないはずです。

Mr.カー：今後の日本についてですが、なにかを提案したり運動を起こしたりする前に、まず感じて欲しいと思います。『犬と鬼』は非常に気落ちし絶望を感じる本だと言われます。でも、「だから日本はこうなってしまったのだ」ということが分かってほっとしたという意見をいただいたこともあります。私見ですが、日本は欧米諸国と違って理屈だとか理論だとか政治上での討論などではなかなか結論が出ない国です。しかし、国民の気持ちの部分がぐっと一致したとき、日本は動きが速くなり力を発揮します。だから、多くの人にまず感じて欲しい、思って欲しい、それが私の願いなのです。

Mr.佐多：今回、私はあくまで場の進行役として参加させていただきました。議論をさらに掘り下げていくにはもっともっと時間が必要だと感じましたが、いつもは書きっぱなし、言いっぱなしのカーさんにとってもこのような対話形式の会は大変有意義なものであったのではないでしょうか（笑）。

あまり知られていないのですが、松下幸之助氏が1974年に『崩れゆく日本をどう救うか』という憂国の書を発刊されており、カーさんが指摘されているような日本の問題点のいくつかを当時既に記されていました（＊3）。驚くべき先見性だと思います。国内でも日本を見つめ直す機会が実は何度もあったのです。しかし、今回新たにカーさんがこのような本を書かれ、結局日本の文化を守ってくれるのはよい外国人であると、逆説的ですが真理であると思うようになりました。私たちが意外と見過ごしてしまうものを、外国人の目からきちんと見ている方は見ているのです。その意味でも、今後日本はよい外国人が大勢住んでくれるような魅力的な日本にならなければならないと強く感じています。

それでは、これでカーさん（母さん）と、私トーさん（父さん）の会を終えることにいたします（笑）。

（＊**1**）「東の大観、西の栖鳳」と並び称された日本画の巨匠。明治、大正、昭和の三代にわたって活躍し、多くの俊秀を指導、京都画壇の総帥として君臨した。
（＊**2**）参考書籍：『大リストラ時代・サラリーマン卒業宣言！』（田中真澄著・**PHP**文庫）
（＊**3**）これが**1979**年の松下政経塾の旗揚げへとつながりました。現在同塾の卒業生の中から**21**名の国会議員が誕生しています。（**2002**年**11**月現在）

秋月禅学と私（1）

―「初めに大悲ありき」―

竹村　牧男

今年（平成14年）は、先師・秋月龍珉（りゅうみん）がこの世を去って、満3年目の年であった。しかし今なお、龍珉の慈眼と思想とは、私の心の中に生きつづけている。龍珉は禅者として、禅の奥義を究めるとともに、仏教の本質を掘り下げ、西田の宗教哲学を論じ、仏教とキリスト教の対話・宗教間対話に情熱を傾けた。その龍珉のめざしたところを、私も少しでもめざしていきたいと切に思う。

龍珉は平成11年9月、満78歳になる直前に示寂（じじゃく）したのであったが、それはその5年前、スイス・ツーク市で開催された「仏教とキリスト教の対話のための国際集会」に出席中、脳梗塞により倒れたことに由来するものであった。その国際集会はほぼ1週間の日程であったが、中日には近郊への小旅行が組まれていた。その中日、午前中、参加者そろってチューリッヒ郊外のチベット仏教寺院に見学に出向いていたが、いつしか龍珉の御様子がおかしくなり、急きょ宿舎に帰り、結局、翌日、チューリッヒ大学病院に入院することになった。この入院に際しては、（株）東機貿社長・佐多保彦氏に大変お世話になったのであり、この場をお借りしてあらためて深謝申し上げたい。1週間ほどして日本に帰ることができたが、後遺症によりもはや昔日のようなめざましい活動はかなわず、そしてついに永遠のお別れとなってしまったのであった。

かのチベット仏教寺院において、休んでいたとき、ある青年が近づいてきて絵はがきのようなものを出し、何か一筆書いてくださいと龍珉に頼んだ。私は、一体、龍珉は何と書くのだろうと、多大の関心をもって見守っていたところ、ややあってのち記した言葉は、「初めに大悲ありき」であった。そのとき、私はあらためて、龍珉の禅の核心はそこにあるのだなあと思わずにはいられなかった。それは私にとっても、先師の最後の法語となったのであった。

龍珉には全15巻に及ぶ『秋月龍珉著作集』があるが、その第二巻の書名も、「初めに大悲ありき」である。その書の冒頭には、「『新約聖書』の『ヨハネ伝』の記者は言う、『初めにロゴスがあった。ロゴスは神とともにあり、ロゴスは神であった』と。初めに何があったのか？初めにあったものが、聖ヨハネの言うように、ロゴスなら、そのロゴスとはいったい何なのか？」と始めている。そしてこの問いに対して、龍珉は自ら答えて、「言（ロゴス）はすなわち愛（アガペー）であった。すなわち『初めに大悲（慈悲）があった』。神の自覚 ── 天地創造の根本は、他ならぬ神の愛であった。『表現愛』（＊1）であった。哲学と宗教とが真に一致する人間実存の『根源的場所』がここにある」と述べている。龍珉は少なくともこの間において、ロゴス即アガペーであるゆえんを明らかにしてはいない。しかし龍珉の体験と思索においては、そうであるほかなかったのであろう。

それにしてもなぜ龍珉は、このような魅力的な言葉を道（い）うことができたのであろうか。それは、龍珉の修してきた禅が、実にそういうものだったからなのであろう。たとえば龍珉が満21歳のとき、初めて参禅した寒松室・宮田東珉は、ある日の提唱に、「禅も大悲心というものがなかったら、禅も畢竟（ひっきょう）、一つの哲学に終ってしまう」と説くが、その言葉は龍珉の胸にいたくひびき、心に深く蔵されるのであった。

その後、武蔵野般若道場の般若窟・苧坂（おさか）光龍に参禅し、満37歳のとき印可を受けるが、その室内、つまり越渓（えっけい）・禾山（かざん）下の公案体系は、徹底して悲心を基調とするものであった。

それらに加えて、親しく指導を受けることとなる也風流庵・鈴木大拙の人と思想が、また悲心にあふれるものであった。実は前の著作集第二巻の第一章「初めに大悲ありき」には、「鈴木禅学の論理」という副題もついているのである。

大拙はもとより禅者であったが、50歳のころ、大谷大学に招かれて、真宗の生きた信仰にふれていく。そうした中で、禅と浄土に通底する宗教心を見出し、日本的霊性ということを言い出す。日本的霊性が知の方面に現れたのが禅であり、情の方面に現れたのが法然 ── 親鸞の浄土教であるというのである。その浄土教の核心は、絶対無縁の大悲に包まれて、この身このまま救われるということにあると指摘する。そのように禅者・大拙も、宗教の根底にある大悲の世界をしきりに語ったのであった。

そのような大拙をよくもの語る話を紹介してみたい。鈴木重信は、『鈴木大拙全集』の月報に、まさに「大悲の人」と題して、次のように記している。

── 先生の晩年、私は永い彷徨の末にカトリックに帰依した。そのことを報告したとき、先生は「それはよかったなあ」と非常に喜ばれた。「君はプロテスタントじゃったが、どうもプロテスタントの人は、頭で

竹村　牧男 / たけむら・まきお
1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍珉老師に参禅する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東洋大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖珉。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『親鸞と一遍』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』など多数。

考え、理屈が多すぎる。それでは本当のことはわかるものではない。その点カトリックのほうがよっぽど禅に近い。第一、君、カトリックには聖母マリヤがあるからな。あれは悲母観世音じゃよ」と言われ、ひとしきりマリヤ礼賛について語られた。……　――

そういう大拙に師事した龍珉が、次第に宗教の核心は大悲の心にこそあると考えるにいたるのは、けっして不思議なことではないであろう。

ロゴスがアガペーであるということは、神の本質はアガペーであるということである。このことを、大拙の無二の心友・西田幾多郎は、宗教哲学的に究明しようとした。龍珉はその西田の宗教哲学も深く摂取している。

西田は、宗教の問題を哲学の終結の問題と考え、最晩年に「場所的論理と宗教的世界観」を書き上げる。そこでは、禅と真宗とキリスト教とを統一的に捉える立場が披瀝されているが、実は真宗の考え方がベースとなり、キリスト教の神も絶対愛の神であるべきことが説かれていく。たとえば、「単に超越的なる神は真の神ではない。神は愛の神でなければならない。キリスト教でも、神は愛から世界を創造したと考へられるが、それは絶対者の自己否定と云ふことであり、即ち神の愛と云ふことでなければならない。之に反し、我々の自己が絶対愛に包まれると云ふことから、真に我々の自己の心の底から当為(＊2)と云ふものが出て来るのである」とある。そして次の一節は、まさに日本的霊性のうちに捉えられた神の姿であろう。

――　之に反し、絶対者は何処までも我々の自己を包むものであるのである。何処までも背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、何処までも追ひ、之を包むものであるのである。即ち無限の慈悲であるのである ――

同じ禅でも、とりわけ悲心を強調する流れの中にあった龍珉は、西田の宗教哲学によって決定的に、「初めに大悲ありき」と思うに至ったのであった。おそらくそうであったと私は思うのである。

龍珉が病に倒れたスイスでの仏教とキリスト教の対話のための国際集会は、ヨーロッパで初めて開催されたものであったが、アメリカではすでに1980年以来、4年ごとに開催されている。龍珉は1987年、バークレーで開催されたその集会にも、1992年、ボストンで開催されたその集会にも参加している。60余の年齢のころから海外に出るようになり、以後国際的な宗教間対話の進展に精力を注いでやまなかった。もともと龍珉は青年時代、キリスト教の中に育ち、のち禅に入っていったのである。禅者として世に立ったあとでも、イエスは最高の禅者であると言ってはばからず、私はイエスの直弟子でありたいとも語るのだった。滝沢克己・八木誠一らキリスト教神学者と緻密な議論を展開し、仏教とキリスト教とが一つに結ばれるところを早くから究明しつづけた。宗教の和解、それこそが時代の課題であると見すえていたのである。

かのスイスでの国際集会では、「仏教とキリスト教の宗教としての共通の根拠 ―― 世界平和の礎を求めて」と題した特別講演を最終日に行うことになっていたが（これは予定の日時に代読された）、そこには次のような一節が含まれていた。

――　私はかつて、ドイツのザンクト・オッチリーエンのベネディクトの大修道院を訪ねたとき、「初めに大悲ありき」と言った。ヴォルフ院長はすかさず、「おおカルナー、そこであなたと私は一つになりました」と応じてくれた。仏教にいう「カルナー」は、キリスト教にいう「アガペー」である。私はここに「仏教とキリスト教の共通の根拠」があると信じる ――

「初めに大悲ありき」、それは龍珉にとってあらゆる宗教の根拠なのであり、そして自らの禅学の根底なのであった。

（＊1）哲学者・木村素衛が提唱した思想
（＊2）人間のなすべきこと、行うべきこと

出会い（24）

ナーベルフェルト師

奥村　一郎

貧しい人生のうちで、大きな分岐点において力強く導いてくださった方といえば、すでに本誌で取り上げた3人の人生の教師であった（「出会い」第19回参照）。今回ここでひと言書きそえたいことは、ナーベルフェルト師のその後の3つの思い出である。

1.1人でも

ⅰ.初ミサ

ローマでカトリック司祭に叙階された後、懐かしい故国日本に帰ったそのころ。ナーベルフェルト師は、名古屋の新しい小さな教会、膳棚（ぜんだな）に移っておられた。久しぶりにお会いできて、幸いな1日を過ごした。ところで、翌日は主日にあたっていたので、説教するように言われたが、ミサに出る前に聖堂をのぞくと、女性が1人しかいない。しばらくフランスの教会にいたときには、3人以上の場合だけ説教することになっていたのを思い出し、そこにこられた神父さまに尋ねた。

「信者は1人しかいないんですが……説教するのですか?」

「はい、1人でもします」

ほほえみながら、はっきりうなずかれた。

祭服を着て聖堂に入ると、もう1人の女性が加わり2人に。その2人を前に、1000人の聴衆がいるかのように、新米神父の私は熱心に説教した。「1人になっても」「1人でも」、99匹の羊をおいて、失われた1匹の羊のためにいのちを捨てる善き牧者キリストの姿（マタイ18・10～14、ルカ15・3～7参照）を、そこでも見た。

今、自分の前にいるもっとも小さい者の1人が、キリストと出会う神の場であることを徹底的に生き抜いた師のうちに、私は「インマヌエル（我々とともにいます神）」の秘義に触れる思いがした。（マタイ1・23、25・31～46参照）

ⅱ.バイブル・クラス（聖書研究会）

「1人でも」というナーベルフェルト師のことばから思い出したのは、それから十余年も前のこと。青年会の聖書研究会の指導を願いにいったときのことである。

「1つ、質問があります。1人になっても勉強をつづけますか?!」

「はい?!」と言うしかない。小さいながら男の意地。

その後何度も「1人でも」の師の一語によって救われてきた。

2.これ、あなたのもの

ⅰ.昼食

ナーベルフェルト師は、名古屋から東京の目黒修道院、さらに秋田県の大館教会に移られるころになると老衰が目立ちはじめ、亡くなられる5年前には、多治見の修道院で老後を過ごしておられた。そのころ、有吉佐和子の小説がきっかけで流行しはじめていた、いわゆる「恍惚（こうこつ）の人」になりかけておられると聞き、1人心を痛めていた。訪ねていった幾人かの知人から神父さまに思い出してもらえなかった寂しさをもれ聞いては、暗い気持ちになっていただけに、少しでも早く見舞いにと決心して出かけていった。亡くなられる1年前のうすら寒い早春のころだった。

お手伝いの若い女性の方に手を取ってもらって玄関に出てこられた師は、もともと小柄であった体がいっそう小さく、細く見えた。黒い毛糸の頭巾（ずきん）をかぶり、すり減った昔ながらの黒い外套がひどくガバガバしている感じだった。しかし、「おお、おくむらさん、おくむらさん」と懐かしそうにほほえみながら、かすれた小さな声で話しかけてこられたときには、うれしさのあまり、瞬間胸がつまり、目頭が熱くなった。

今度は私が手を取りながら、こぢんまりした新築の修道院の聖堂や修室を見せてもらった。窓に注ぐ陽ざしも暖かそうなので、2人で外に出ることにした。ぶどう畑のあいだのでこぼこした道を通り抜けて墓地に入り、しばらくそこのベンチに腰をおろして思い出話をした後、修院に戻った。ちょうど昼になっていたので、玄関のところでお手伝いの方が待っておられた。

「奥村神父さま、応接間に食事を用意しましたので、どうぞ召し上がってください」と言われ、「では、また、後で」と、神父さまの手をちょっと握ってから部屋に入ろうとした。ところが、神父さまは廊下に突っ立ったまま、こちらを見ておられる。

「神父さま、お食事は修道院の方にありますからいってください。皆さんがお待ちです」とお手伝いの方が言われても、やさしい表情で、黙ったまま動こうとされない。

「あっ、神父さま、奥村神父さまといっしょに食べたいのね。ごめんなさい。すぐここに持ってくるから」と言い残して、お手伝いの方はすぐに食事を盆にのせてこられた。

いっしょに並んでソファに腰をかけ、にっこりこちらを見つめたまま、

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。
48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。 51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。 57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。 59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。 79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。 現在、京都聖母学院短大名誉教授。
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

食事をはじめられる様子もない。

「神父さまは、食べないんですか?」と尋ねる。こちらも、なんだか箸がすすまない。繰り返し、「神父さまも、いっしょにいただきましょう」と言って勧めても駄目。相変わらず黙ったまま、静かな目つきでこちらの方を見ているだけ。困ったな、と思っても、私も食べないわけにはいかない。おなかはすくし、そばで見ておられると食べづらい。すると、神父さまは自分の前に置かれた膳の縁に手をかけて、ちょっと押すようにし、にっこり笑って、「これ、あなたのもの」と言われるだけ。

「いいえ、違います。それは、神父さまのもの。私のものは、ここにあります」と言ってみても、納得されそうにない。それどころか、また膳に指を添えて「これ、あなたのもの」の繰り返し。

「困っちゃうな、神父さま。いっしょに食べてくださいよ!」と強く懇願するが、いっこうに効き目がない。どうしようもなく、私は自分の分を食べ終わる。「これ、あなたのもの」という神父さまの心を汲んでと思い、隣の膳にもちょっと箸をつけたら、とてもうれしそうだった。

押し問答の食事がなんとか終わるころ、お手伝いの方がこられた。事情を説明すると、ほとんど残っている神父さまの膳を見て、

「この神父さまには、ほんとうに困ってしまうんです。いつも『これ、あなたのもの。これ、あなたのもの』と言って食べないんですもの。だから、やせてしまわれるんです」と、こぼす。

そこで、いっしょにみかんを1つだけ食べて、お茶を飲んでお別れした。これが、まだお元気だった師との最後の思い出となった。

修道院からバス停まで、案内しながらついてきてくださったお手伝いの方が、道々、「ナーベルフェルト神父さまは、ほんとうに、私たちの宝です」と、言われたひと言が、いっそう身にしみた。

ii. 毛布

同じ年の冬だったと思う。風邪をこじらせて、名古屋の聖霊病院に入られたと聞いた。そのとき看護にあたっていたシスターの話。お年でもあり、付き添いの人を頼むことにしたのだが、神父さまは自分のベッドにかけてあった毛布をはずして、「これ、あなたのもの。これ、あなたのもの」と言いながら付き添いの人に渡してしまうので病気が悪くなるばかり、とても困った、ということだった。多治見修道院での昼食のことがまた思い出された。

東京都吉祥寺教会にて
（前列右から3人目がナーベルフェルト主任司祭）

生前の神父さまを知る、教会の信者がしばしば口にしていたことがある。

「ナーベルフェルト神父さまに物を差し上げてもつまらない。すぐに、人にあげてしまうんだから」

私など、その年になったらなんでも、「これ、わたしのもの。これ、わたしのもの」と言うのではなかろうかと思うと、情けなくなる。

いつだったか、同じ神言会の邦人司祭に会って、そんな話をしていたとき、「あの神父さまを見ていると、“ 美しく枯れていく ”という感じですね。僕なんか、醜く腐っていくんだろうな」と、感嘆と悲哀をこめて言われたことを思い出す。

結びに

ほんとうに大切なことば、生きたことばというのは、ただの教訓としてではなく、その人自身の生を貫く愛の現実をあらわす。「事」がそのまま「ことば」となる。聖書、特に福音書は、その意味でまことにイエス・キリストの「事」と「ことば」とがひとつになった「遺言（テスタメント）」と言える。

── 私があなたたちを愛したように、互いに愛し合うこと、これが私のおきてである。友のために自分の命を捨てること、これにまさる大きな愛はない。（ヨハネ15・12、13）

福音記者ヨハネは、このイエスのことばをうけるかのようにして、さらに言う。

── 私たちが愛を悟ったのは、イエスが私たちのために命を捨ててくださったからである。であれば、私たちも兄弟のために命を捨てなければならない。（Ⅰヨハネ3・16）

ナーベルフェルト師は、私にことばとしての遺言を残すことはされなかった。その存在自体が遺言であった。否、その存在を失うまでの愛の尊さを、私だけでなく、接するすべての人々に示していかれた。自らを失うことによって、失われることのない存在、イエス・キリストを身をもってあらわすことを知っていた人だったからである。

── かれは栄え、私は衰えなければならない。（ヨハネ3・30）

くも膜下出血（破裂脳動脈瘤）治療の最近の動向について

―80歳前後の高齢患者を治療して思うこと―

米川　泰弘

米川　泰弘　/ よねかわ・やすひろ
1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。
京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。
チューリッヒ大学病院 http://www.usz.ch/

最近、立て続けに80歳前後の高齢者が脳動脈瘤の破裂によるくも膜下出血で入院してきたが、全員手術はうまくいき術後の経過もよく、連携しているリハビリの施設に送ることができた。今回はこのような高齢の患者の治療を例に挙げて、最近のくも膜下出血の治療について思うところを述べたい。

退院したすべての患者のカルテをチェックし、その表紙に病名及び行った手術名を書き入れて資料整理のための準備をしておくのも私の仕事である。チェックする内容は、カルテがスタッフの手によってちゃんと作られているか、大切な手術記事が術者によって適切に書かれているか、大事な検査所見の結果が抜けていないか、などである。このチェック作業を通して珍しい症例も再確認でき、症例報告のためのメモもとれる。まとまった数のある症例では、これから博士号学位請求論文を書く学生達に与えるテーマを思いつく参考にもなるのである。

この病名入れの時に、先日リハビリの施設に転院した81歳の女性のカルテの番になった。彼女には破裂する前から動脈瘤があるということが他施設で診断されてわかっていたが（これを未破裂動脈瘤と呼ぶ）、そこで勧められた出血を予防するための血管内動脈瘤塞栓術（後記）は、年齢のことや動脈瘤の形や大きさからみてこの血管内手術は難しいかもしれないと医師から言われたこともあり、本人の意思でしないでいたところ、破裂出血したのである。5年前に乳癌の手術を受けたがその後再発もなく、比較的元気に一人暮らしをしていた。しかし突然の激烈な頭痛で発症し、嘔気、嘔吐が続いて激しい頭痛も持続した（これらは典型的なくも膜下出血の症状である）。病院へ行くという判断もできずそのまま1週間が過ぎ、息子が訪問した時には無感動、無表情でぼんやりとしていて、日時や自分のいる場所がわからなくなる見当識障害も現われていたとのことであった。しかし幸いなことに、彼女の場合は出血が意識を失う程ひどくはなかった。高齢者の一人住まいの場合、発見が遅れると衰弱が進み、まずその状態からの回復を図ることが一大問題となる。

さて、脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血の三大死因とその割合を整理してみると ① 最初の出血による脳のダメージ（25.5％）② 数日以内に最も起こりやすい再出血（17.3％）③ 出血後1週間から10日経ってから脳血管の周りに広がった血液の分解産物が脳血管を収縮させ（脳血管れん縮）、その結果脳に行く血液が不足することによる脳梗塞（35.5％）が挙げられる。

脳外科の手術は主に ② の再出血を防ぐために行われるのだが、これは脳血管の分岐部にできている出血源である動脈瘤の首の根っこをクリップで止めるものである（図1）。この際マイクロサージェリーを利用し充分な照明のもとに術野を手術用顕微鏡で拡大して手術を行い、周囲の大切な血管を損傷することなく上記のクリップ止めの操作をするのである。近年はこの手術に加えて前述の血管内動脈瘤塞栓術（図2）も加わった。この手術は血管の中にカテーテルを入れて動脈瘤を血栓化させるコイルを詰め、血液が動脈瘤に入って破裂を起こさないようにする方法である。前者の方法では開頭術を要するが、後者では開頭術を必要とせず股動脈を介して脳内に導入したカテーテルを利用する方法で侵襲が少ないという利点がある。① の、既に受けてしまった重篤なダメージは元通りに回復させる有効な方法はないので、動脈瘤がまだ破裂しないうちに、いづれかの方法で処理するのである。しかし未破裂動脈瘤を手術する場合は一見健康な状態の人に手術を行うことになるので、手術後合併症が起こっては元も子もなくなるのである。③ の脳血管れん縮の問題に対しては、原因となる広がった血液をできるだけ予防の意味で取り出したり、れん縮出現時に脳血管を拡げる薬剤を投与したりするのだが、まだまだ満足のいく程度にまでは問題は解決していない。また見方を変えて、この血流不足の時期を、麻酔剤を用いたり低体温に保って脳の代謝を乗り切る方法も行われているが、その間ずっと集中治療室を必要とするこのような大がかりな治療法とて合併症なしではあり得ないし、常に100％の効果が得られるとも限らないのである。

前述の患者に話を戻そう。彼女は当科に入院して緊急開頭手術となった。これがひと昔前であったならまず患者の年齢が問題になり、医師も家族も手術はあきらめ、積極的な検査もせずただ全身状態の回復を図るという保存的な治療のみにとどまっていただろう。患者はやがて再出血を起こして亡くなることがよくあり、落胆する

図1:脳動脈瘤クリッピング術

図2:脳動脈瘤塞栓術

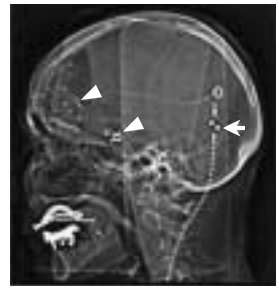

図3:脳室腹腔シャントを示す頭蓋X線側面像。矢印 ◀は圧可変バルブ装置。他の矢印 ◀ は動脈瘤を閉塞したクリップを示す。この例では2個の動脈瘤があった。

ことこの上なかった。しかし最近では医療の進歩に伴い、くも膜下出血に伴う合併症に関する全身管理も進歩したので、高齢者でも発症前の全身状態がよければ積極的に検査をし、もはや単に年齢で線を引くことなく若い患者と同様にどんどん手術をしている。ただし高齢者の手術は、脳血管が動脈硬化で非常にもろくなっていることや心肺機能が落ちていることもあり、留意すべきことが種々あるので熟練した術者が慎重かつ迅速に行うことが大切である。

この患者にはまた、くも膜下出血の術後に時々発症する水頭症に対して、脳室腹腔吻合術（シャントと呼ばれる）をも行った（図3）。血液がくも膜下腔に広がると、その後遺症で脳脊髄液の循環が侵されて水頭症が発現し、痴呆、歩行障害、尿失禁などの症状を呈するのである。高齢者にはもともと髄液循環がうまくいかない傾向があり、出血がこの傾向をさらに促進させると考えられる。術後この患者にも上記の症状が現われ始めたので検査したところ水頭症を確認し、シャントに踏み切った。この手術では、髄液をシリコンチューブを用いて皮下で脳室から腹腔へと誘導しそこで吸収させるのである。ただ、シャントの手術が成功しても、その結果として髄液が流れ過ぎると硬膜下血腫を起こす原因になり今度は血腫除去の手術が必要となるし、反対に流れが充分でないと上記の3症状が回復せず自立が望めなくなる。近年この問題に対応して髄液の流れを調節できるシャントシステムが開発され、個々の患者に適したバルブ圧を調節できるようになり非常に重宝している。この圧可変バルブ（SOPHYSA社製）の出現以前には、手術の後一時的に上記の症状が軽快しても、時間が経つとその改善傾向が消滅することがあり落胆したものだが、今では圧を少し下げて髄液の流れをよくすると再び症状を改善できるようになった。

さて先日、日経新聞に日本の医療改革についての記事が出ていた。その中に日本の人口あたりの病院ベッド数は欧米先進国の2～3倍で、恒常的な人手不足もベッドの過剰と表裏一体であることが指摘されている。また患者の平均入院日数は欧米の2倍以上で、もし不必要な入院日数を減らしてしまうと空ベッドが増え病院の採算が悪化するので、意図的に入院期間を延長しベッドを埋めているという実態も指摘されている。日本から見学に来られる先生達がまずこちらのベッド数を質問されるのは、「大きなベッド数の“ 大病院 ”即ち成功の象徴」とされる日本独特の事情から発しているのだと記事を通して推測できた。「欧米では1960年代から医療の進歩に伴って人手を厚くし入院日数を短縮、ベッド数も急減させた」とあるのは事実で、こちらでは術後、速やかに個々の患者に合わせた自立と復帰への治療計画が立てられ、必要最短の入院期間中に各専門家達が集中的に目標に向けて尽力する。入院日数が少なくてすむ背景には、同じ治療方針で中断なしに引き続き患者の復帰をめざしてくれる優れたリハビリ施設との連携があることも挙げられる。当科でも手術の翌日からその患者を担当する理学療法士が（必要に応じて作業療法士も）毎日欠かさず病室に出入りしリハビリ訓練を開始するのであるが、患者の転院前には引き継ぎのリハビリ施設に向けて詳しい「セラピー（療法）レポート」と手紙を作成する。

前述の患者のカルテのファイルにもリハビリ施設に宛てた作業療法士の手紙のコピーがあった。まず何を目標にセラピーを実施したのかが書いてあり、① 顔面口腔のセラピー ② 自立介助、日常生活活動のセラピーの2項目について述べている。①では、この患者はもともと多少の嚥下障害があり流動物を飲み込む時には注意しないと誤嚥する傾向があったが、術後それがひどくなったのでPEGゾンデ（胃瘻（いろう））をもうけて液体と薬剤はこのゾンデから採取することにし、固形物は柔らかいものから徐々に経口で摂取できるように練習をしていることや、口腔内の清掃は側について頸部をよく前屈させて行わせないと誤嚥すること。②では着衣はほとんど自分でできるが、まだ多少の助けが必要である。即ち立って着衣をする時に倒れないよう注意してやる必要があること。このような内容が退院4日前に書かれている。リハビリの施設では即座に何が問題なのかを読み取り、連続したセラピーが開始できるのである。彼女はそこでさらに2～3週間のリハビリを続ければ効果が出て再び自立生活ができるようになるはずである。

こうして高齢の患者が、再び元気な日常生活を取り戻せるようにするには、まず大前提として我々外科医が手術技術を研鑽することが大切であり、加えて高齢者特有の数々の問題をよく意識して治療にあたること、理学療法士、作業療法士などの専門家によって早期からきめこまかいセラピーを実施していくこと、などがポイントとして挙げられるであろう。

ブドウ栽培の丘の風景

ジャン・コラルド

Jean Collardot / **ジャン・コラルド**
1925年、フランスのニュイ=サン=ジョルジュ市生まれ。 **69**年から**95**年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。 外国語、歴史、宗教哲学、デッサン、絵画について造詣が深く、**7**カ国語を解する。

よく次のような質問を耳にします。「なぜブドウ栽培者は石ころだらけの丘の斜面にブドウを植え続けるのですか。あのような場所では耕作に適した土の層は50センチがせいぜいです。下の平地のほうにはもっと深くて豊かな土があるというのに…」。それに対して、運命論者ならおそらくこのように答えることでしょう。「それが伝統であり、現役の彼らとしては父親の栽培法に従っているだけのことで、父親は父親で先祖からそういった方法を受け継いできたのだ」と。信心深い者ならそれは神のご意思によるものだと答えるかもしれません。

一説によると、天地創造の折、神は本質的には完璧であらせられるものの、幾分思慮に欠けるところもおありだったのだそうです。聖書に書かれているとおり、神は水から地を切り離された後、植物をお造りになり、そのおかげで人間は生きる糧を確保できるようになりました。神は将来主食となる穀物に最良の土地を割り当てられたのです。ところが、よい土地がすべて分配された後、神の御手には自らのプログラムに入れ忘れになられたブドウの苗木が握られていました。急ぎあれこれ検討なされた結果、ほかのいかなる植物の栽培にも適さない石ころだらけの丘の斜面しか残っていないことにお気づきになられたのです。神はブドウに恵みを垂れ、それを栽培することになる人間に最高の満足を与えるために、あそこならブドウが自身の最良の部分を引き出せるだろうと、ブドウに割り当てたのがこれらの土地だったのでした。

これはもちろん風説にすぎません。ブドウはどのような土地でも栽培できるものではなく、水はけの悪い場所には順応しないことは経験からとっくにわかっていましたので、水はけのよい石灰質と粘土質の砂礫が堆積した私たちの丘の斜面こそまさにブドウの栽培には適した土地だったのです。さらにブドウは日光にさらすことが特に大切なのですが、ソーヌ川の平地に沿って続く日照に恵まれた私たちの丘陵地帯は、その意味でも適しているといえます。

とにもかくにも詩人のヴィクトル・ユゴーはいっています。“ Dieu n'avait fait que l'eau, l'homme, lui, a fait le vin ”(神は水を造っただけだが、人間はワインを造った)と。

しかし魔法の杖の一振りですべてが造られたわけではなく、私たちの祖先がいうところの魔法のナタカマ(＊1)で造られたのです。“ Gaulois ”(ガリア人)にとってのいわばシャーマン(まじない師)であったドルイド僧(＊2)の象徴が、後に“ GOUZOTTE ”(グーゾット)という名前でブドウ栽培者の作業用具となったのが、ナタカマです。さまざまな自然の要素を活用する術(すべ)を心得ていたブドウ栽培者のおかげで、今日私たちは丘の風景の美しさに見とれて、ワインの風味を大いに楽しむことができるのです。

当初はブドウの栽培についてなにも明らかにされていませんでしたので、丘の斜面はやせた牧草地として山羊や羊にとって役立つのがせいぜいの石の堆積としか見えませんでした。そのような状態が数百年続きましたが、突然、外的要因が状況を一変させました。それはジュリアス・シーザーによるガリアの征服でした。

ガリア人は森の中で生活し、樹木の活用に長けていました。他方、ローマ人といえば石の文明です。征服した領土に住み着くために、彼らは兵士の野営地の設営、ついで道路、荘園、神殿の設置に必要な材料である石を探し始めました。彼らが探し当てた材料は、丘の斜面にふんだんに露出していたというわけです。そして石を掘り出した跡には、土の窪みが現れました。こうして自然と土地の小区画ができ、そこにローマの兵士たちはブドウを植えたのです。地元の農民は、経験に基づいてブドウを栽培する彼らの手本に従ったのですが、いくつかの大修道院が最初の“ domaines ”(ドメーヌ)(＊3)を形成し、その知恵を栽培の改良に生かすまでその状態は続きました。

今日私たちが目にしているブドウ栽培の丘の風景はこのようにしてでき上がり、その後も時の流れとともにさまざまな変貌を遂げてきました。ブドウは初め圧条法(取り木法)によって繁殖させました。ブドウの小枝はたわめて土中に埋めさえすれば、根づいて新しい株を生むからです。しかし、この繁殖法は植栽に一種の無秩序をもたらしこそすれ、スキやツルハシを使って手で行われていた栽培を容易にしてくれることはありませんでした。

その後、ブドウの根を襲う害虫で、1880年代にフランスのブドウ畑を全滅させた張本人である“ PHYLLOXERA ”(フィロキセラ)(＊4)の到来により、すべてのブドウの木の伐採が必要になりました。ブドウの木は接ぎ木したアメリカの苗と一緒に植えかえられました。こうして取り木法が禁止された結果、ブドウ畑は私たちが今日知っているような整然とした配列と幾何学的な外観をもつようになったのです。

ブドウ栽培が行われる以前にも、丘に表情をもたせることについて

ミュルジェール

カボット

私たちに考えがなかったわけではありません。前世紀の半ばまでは、モモを始めサクラ、ナシ、アーモンドといった果樹が丘の風景を彩っていました。ブドウがまだ眠りから覚めないとき、アーモンドの開花によって最初に春の訪れが告げられます。次に、「サクラは自分より白いものを見たがらない」ということわざどおり、なごり雪がなくなるころサクラが開花します。最後は一番数の多いモモですが、それらが開花した様子はまさにバラ色のじゅうたんを敷きつめたようでした。

しかし、このような春の美しい光景も機械化とともに消え去る運命にありました。それまでは、スキを引いていた馬は木々と仲良くやっていました。ところが、無遠慮なトラクターが登場した途端、動き回るのにじゃまとばかりに木々を追いやり始めました。こうして木々は犠牲になり、色彩豊かな春の詩情ともども消滅してしまったのです。

そのうえ、機械式農具は丘の風景の別の側面を変えた張本人でもあるのです。ブドウ畑の区画が形成された当初は、除石作業が行われていました。地表の石や、後日スキで深く耕したときに地中から掘り出される石を集めて山積みする作業です。これらの石の山はブドウ畑との境目にあり、“ MURGERS ”(ミュルジェール)と呼ばれる石垣を形作っていました。手押し車の装備しかなく、石をもっと遠くに運ぶ手段がなかった当時のブドウ栽培者にとっては、これが最も現実的な解決策だったのです。時の経過とともに灰色を帯びた、そして丘に沿っていたるところに見られた石の山は、土木用重機の犠牲者である木々とあい前後して姿を消しました。この重機のおかげで、ブドウ栽培者は耕作面積を少しでもかせぐために土地の隆起を削り穴を埋め、自分の畑を立て直すことができたのですが…。

こうした状況の中で、過去を物語る証人である“ CABOTTES ”(カボット)も消えていきました。カボットというのは、ブドウ栽培者が悪天候に襲われたときに避難所の役目を果たす、石でできた小さな建物のことです。そこに農具をしまうことも、もちろんそこで腹ごしらえをして元気を取り戻すこともできました。昔は、ブドウ畑で働いていた人々は仕事場まで歩いていきましたので、昼食のために自宅に戻ることなど問題外だったのです。

今日でもいくつか残っているカボットは、さまざまな外観を備えています。ミュルジェールを作ったときにそこに穴をあけただけの最も簡単なものから、かつては城館の中に設けられたハト小屋を思わせる入念に作り上げられたものまであります。

今日ではこういった過去の遺跡をめぐる意識改革が進み、残存しているカボットを修復した村もあります。見学ツアーも催行され、古きブルゴーニュのイメージを思い起こすことができるようになりました。

(＊1)鉈鎌。鎌に鉈の柄をつけたもの。
(＊2)ガリア人とはガリア地方に住んでいたケルト人のことを指すが、そのケルト社会で宗教的指導者の立場にあった聖職者のことをドルイドと呼んだ。
(＊3)ブドウ栽培から瓶詰めまでを一貫して行うブドウ園
(＊4)ブドウネアブラムシ

―ジャン・コラルド氏について

私がコラルド氏に初めてお目にかかったのは今から10年以上も前、“ Confrérie des Chevaliers du Tastevin ”(ブルゴーニュワインの騎士団)の騎士に私が叙されたときです。1934年に創設されたこの団体は、各界の著名人から一般のワイン愛好家まで幅広い支持を得、今では世界に約12,000人の会員を擁しています。95年には日本にもその支部が開設され、現在120余名の会員を数え、会長は伊藤恒氏(元ホテルニッコー会長)、私は専務理事を仰せつかっております。コラルド氏は47年からこの団体の活動に参加され、現在“ Grand Prévôt ”(グラン・プレヴォ＝フランス王政下で使われていた要職名の一つ)という役職についておられます。

コラルド氏は1925年、Nuits-Saint-Georges(ニュイ＝サン＝ジョルジュ)に生まれました。大学を卒業後、長い間市の文化および都市計画担当助役を務められ、90年に一線を退かれてからも、外国語、歴史、宗教哲学、デッサン、絵画について深く学ばれ、フランス語はもとより、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、日本語の7カ国語を話されます。

ここ最近、年に一度は来日されておられるコラルド氏に、今般、当誌への寄稿をお願いしましたところ、氏はご快諾くださいました。ワインを中心とするブルゴーニュの文化全般に関わるエッセイをとお願いしておりますので、ぜひ皆様にその世界を楽しんでいただければと思います。

なお、日本語への翻訳は弊社・業務室が当たりました。

佐多保彦

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュへいらっしゃいませんか。
極上の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、
中世そのままの街なみ、美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株)佐多商会業務室　担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087